

ふるさと風声



星野八郎さん（通4回）が、 第47回全国俳句大会 大会賞を受賞

社団法人俳人協会・俳句文学館が主催する第47回全国俳句大会が、去る平成20年9月17日(水)、有楽町朝日ホールで開かれ、星野八郎（通4回）さんが、見事大会賞を受賞しました。この大会は、全国各地の俳句愛好家の皆さんが日ごろの活動・研鑽の成果を披露するもので、年に一度開催されています。

第47回大会には約600人の俳句愛好家が参加しましたが、大会賞は応募のあった数多くの句の中から全部で八句選出されました。

今回受賞した句は、

鼻輪まだ知らぬ牛の子きんぼうげ

です。

春の初々しい子牛のおだやかな情景が思い浮かぶ俳句であると思います。

星野八郎さんは、郷里高田において生涯学習として俳句を楽しんでいる「春雪会」で、地域の方々に手ほどきするボランティア活動でも活躍されています。星野八郎さんの今後の更なるご活躍を祈念しております。

三村 到（高30回）

「宇喜世」国登録有形文化財に指定

高田仲町、かつて田端といわれた地にある料亭「宇喜世」が、昨年10月「国登録有形文化財」に指定された。しかし、近年、高田田端の料亭は往時の勢いがなく「宇喜世」の存在を知らない方もおられるようだ。

高田本町4丁目の中ほどに、西に向かう道路、大門通りがある。突き当たりが「浄興寺」である。途中、儀明川を渡る橋がありその名は「歓喜橋」である。擬宝珠のついた赤い欄干のある「歓喜」に相応しい華やかさをもった橋であった。「歓喜」の気分ですその橋を渡り、仲町通に面し、南西の角にある宇喜世に通われた粹人も多かったはずだ。

「宇喜世」の前身は江戸時代末期、当時、仕出屋「甚ノ助」を営んでいた寺島甚之助の娘婿である八蔵が、明治20年頃、座敷を造り料亭「寺島屋」をひらいたのが始まりと言われている。その後、代は移り、寺島竹松・ハルの時代になった。寺島竹松はたいへんな「普請」好きで、「道楽者」と言われるほど普請好きであった。彼の普請道楽が高じて今の「宇喜世」の原型が出来たと言っても過言ではない。その後、寺島繁次、悦子夫妻が跡をつぎ、昭和20年代後半から経営に携わり維持されてきた。

繁次、悦子が経営を受け継ぐ前の昭和19年、戦火が激しくなり軍の意向もあったのだろう、「宇喜世」が「大和会館」と名をかえた時期があった。21年に再び「宇喜

世」に戻ったが、時代背景を感じさせる。

料亭は「女将」の存在が浮沈に大きな影響を与える世界である。悦子の元気で明るい性格から隆盛を誇っていたが、時代の趨勢もあろう、昭和20～30年代の勢いは失われつつあった。更に、平成15年10月、女将悦子の死が契機となり、かつての繁盛は陰をひそめ、衰退の傾向が強くなっていった。

正確な記録はないが、戦前には田端「芸妓」が250人はいたそうである。山砲、歩兵と言った陸軍連隊のあったことも理由であるが、その隆盛振りは戦後も昭和30年でさえ90人以上の芸妓がいた正確な記録があり、そのことを思うと、戦前の芸妓数250人は誇張された数字ではない。では、現在はいったい何人か。僅か6名になってしまった。芸妓の数を書いたのは、割烹料亭の維持は、ある意味、芸者の数と背中合わせの関係にあると考えたからである。この数字が示すように、「宇喜世」「やすね」に代表される高田田端の料亭経営の近年の厳しさが理解



丹塗りの東門。建築年代は昭和13年頃と推定される。
北側の正門に対し、脇門にあたる。

できよう。

さて、宇喜世が「国登録有形文化財」に指定されるについての経緯は知らないが、この機会に、この春開催された「披露の会」で配布された資料をもとに宇喜世について紹介したい。

建物は、木造3階建、入母屋造りである。現在の建物にほぼ近い形に到った建設時期は昭和13年頃と言われる。寺島八蔵が割烹料亭を始めた頃は「寺島屋」と呼ばれ、昭和8年になり今の「宇喜世」になった。

玄関は大門通りに面した「北門」が正門である。仲町通りに面した「東門」は2階大広間を増築した昭和5年前後ではないか、同じく歓喜橋も昭和5年頃に建設されている。

正門の「北門」は仲町通りから入るのではなく、料亭という幾分遠慮した性格からか脇からはいるよう一寸遠慮した位置になっている。

北門を入ると正面に玄関がある。玄関扉は今ではアルミサッシュに替わってしまったが、叩きから玄関に上がると左脇に下足室があり、専任の「番」がいて、履き物を預けて客はよい気分で座敷にあがったものだ。

今では待合ホールに改装されてしまったが、上がり框の先に小さな客間「桐の間」があった。凝りに凝った造りで竹松の面目躍如、普請好きがにじみ出た独特の和室で、凝った壁・天井で、廻り縁には彫り物の飾りが隙なく施されていた。玄関先の部屋なので、満室などの特別な場合にだけなじみ客に開放していた。

その奥には、今はないが「浴室」があり、客も利用していたようだ。

1階の客室は、玄関を入り、右に曲がると45畳の「松の間」があり、続き間として20畳の「竹の間」がある。両部屋とも西に開かれた1間(1.8m)の幅をもつ広縁をもち、二間続きの南北に長い大広間になっている。30~40人の宴会や会合には最適で、今では定食による昼食会場としても利用されているようだ。

広縁の先には、池を配し、楓などの古木が植えられた手入れの行き届いた日本庭園がある。宴が始まる前に広縁で茶を飲み、庭を愛でる演出の場として最高の広縁である。

この庭も、竹松が建物に劣らぬ熱の入れようで、長期にわたって造り上げた庭園である。秋の紅葉も素晴らしいが、特に冬、雪囲い細竹に積もった初雪と枝葉の雪との調和した庭園の風情は、一時ではあるが、雪国で生まれた者だけが知る冬の風情ある絶景である。

2階にある宴会場は、先にも記したように昭和5年に増築された記録がある。奥行き17間、間口4.5間、153畳の和室と立派な舞台があり、150人以上の客が利用できる当時としては大きな広間である。

また、2階には別に3室の小座敷がある。三日月を象った床壁のある「月の間」、「春の間」、水車の古材をふんだんに使った「水車の間」と造りもそれぞれ異なる3室がある。

3階にも3室の小室がある。「桜三階」、「仲三階」、「新三階」と変哲もない名がつけられているが、八畳の桜三階は床柱に桜

が使われ見晴らしも良く、私もよく利用した思い出の深い部屋である。

仲3階は変則の五畳だが、受ける印象は三畳くらいに感ずる最も小さな小座敷で、一人か二人程度の客に供される味わいのある小部屋である。3階にある三室の小部屋にはそれぞれ別の階段、便所があり、利用客の便に配慮した配置になっている。

別に3階に通称「四階」とよばれ「妙高の間」と名付けられた八畳間がある。周囲に回り廊下があり、四方を見渡すことが出来る座敷である。実際は3階であるが、大広間の上に造られた突出した形の和室で、4階に匹敵する高さから「四階」と呼ばれている。今では周りに建ち並ぶビルにさえぎられてしまったが、かつては金谷山から妙高、南葉や高田の中心街が眺望できる最高の部屋であった。3階、4階共に配膳の苦勞と防災面から利用頻度が少なくなっているのは残念である。

高松宮様が冬季国体で数回宇喜世を訪れている。ロビーに訪問時の宮様と竹松が写った記念写真が2枚飾られている。

これが宇喜世の簡単な概要である。

このところ、経営的には沈滞気味の「宇喜世」ではあったが、「国登録有形文化財」の指定を受けたこともあり、かつての経営形態をぬぐい去り、時代に即した経営を模索し、経営面、利用者の双方が満足できる努力が始まったと聞き、喜ばしいことと思う。

東京近郊に住む頸城出身者の一人として思うことは、関東、東京には数多くの豪華な食堂、レストランがあり、簡単に利用で



2階「春の間」。20畳敷きと広く、芸妓の踊りも楽しめる。

きるが、宇喜世のような古きよき時代の伝統ある建物で、床の間を背に広々とした座敷で、ご馳走を頂くとすると、東京では不可能に近い。

同窓の皆さん、帰郷した折りに、一寸、贅沢な気分で「宇喜世」で食事を楽しまれたら如何であろうか。昼には簡単な定食も供しているようだ。食後に、数ある贅をこらした「小座敷」を見て回るのも一興かと思う。

高田には全国制覇した「日本三大夜桜」、いま話題の「天地人」など、観光地としての地位も高まりつつある。

宇喜世が「国登録有形文化財」に指定されたこの機会に、宇喜世にとどまらず他にも存在する高田を象徴する建築物を掘り起こし、記念碑としてではなく、利用することで価値を生みだし、観光面からも町おこしにつながればと、大いに期待したい。

この遺産「宇喜世」は木造であり、火災が一番怖い。消失すれば再建は絶対に不可能である。不慮の事故にも万全の管理を頂くようお願いしたい。

樫野利介（高6回）



高田世界館、「近代化産業遺産」(経済産業省)に選定される

2009年2月、本町6丁目の高田世界館(旧高田日活)が、経済産業省より『近代社会の発展とともに花開いた都市の娯楽・消費文化の歩みを物語る近代化産業遺産群』のひとつに認定されました。

■近代化産業遺産とは

近代化産業遺産とは、幕末から昭和初期にかけての産業近代化の過程における先人たちの努力や工夫という無形の価値を物語るもので、建造物だけでなく、機械や文書まで含みます。個々では価値不明な書類でも、複数の遺産と関連付けてその役割を明確にしています。地域活性化の「種」となることを期待して、平成19年度に「近代化産業遺産群33」、昨年度は「近代化産業遺産群 続33」を選定しました。

■経済産業省の認定の意義

世界館が芝居劇場「高田座」として新築、開業したのは1911年。あの帝国劇場と同年です。近世町人文化の余韻を引く芝居小屋から、明治期の西洋式演劇、さらに日比谷

公会堂のような、集会やレビューまで、幅広い用途の多目的ホールへの転換期でした。電鉄会社が郊外に事業展開し、都会には百貨店が開業しました。浅草に映画の常設館が誕生して以来、映画は大衆娯楽の花形に躍り出ました。

一方、明治維新で衰退した城下町高田は、明治末の陸軍師団の誘致で活気を取り戻しました。地位の高い軍人とその家族が転入して、要人も来訪しました。軍への物資供給だけでなく、都会風な「ハイカラ文化」の流行も高田の近代化に大きく貢献したのです。こんな時代背景の中、「高田座」は流行の先端であった活動写真の「世界館」にいち早く衣替え。時代を経て、当時の劇場や映画館の大半が姿を消した中で、現役最古の映画館として生き延びてきました。

建物自体には、都会の官庁や銀行建築に見られる精巧な洋風ディテールや大理石彫刻のような高価な素材は見られません。しかし、懸命に「ハイカラ」を実現した職人の意気込みと木造建築技術で知恵を絞った地元大工の様子が伝わってきます。

経済産業省は、認定を契機に遺産自体の魅力を高めるとともに、資源・人材・資金を活かして地域活性化の素材となることを期待しています。遺産単独での予算措置は未定ですが、中心市街地活性化事業とも歩調をあわせ、まちの生き証人「高田世界館」として再生し、かつての大衆娯楽の殿堂復活を願っています。

関 由有子 (高27回)



雪太郎の初恋物語

「雪太郎の初恋物語」という名のそのジャムは、上越市牧区の特産品です。口にした安倍晋三首相(当時)が「意外だ、美味しい!」と感想を洩らしたそうです。聞きよによっては何とも失礼な感想ですが、これが大根のジャムと聞けば納得できるエピソードです。

早速一口食べてみました。控えめな甘さの中に、しっかりと大根の味も感じられます。塩味のクラッカーに乗せれば何枚でも食べられます。

誕生の陰には、農村の抱える問題の数々を克服しようと立ち上がった農家の方たちの取組みがありました。高冷地を活かした辛みと筋の少ない大根づくり、その大根を活かした特産品づくり、女性が就農しやすい環境づくり、「大根いっぺごと祭り」など



イベントを通じたPR等の取組みが、1997年新潟県の「一村一価値づくり事業」で大賞を受賞、2006年には「立ち上がる農山漁村」のベスト4に選ばれ、首相官邸に招かれました。安倍元首相の名言?はそのときのエピソードです。

大根のジャムをどこかで見かけたら、それは故郷の新しい味。一口お試してください。
400円。 清水史枝 (高27回)

東京新潟県人会、来年で創設百周年

「東京新潟県人会」は明治13年(1880年)に大倉喜八郎等により設立された北陸親睦会が起源と言いますから、130年の歴史を持っていることとなります。

当時、新潟県の人口は全国一で、明治31年即ち111年前に東京に抜かれるまでは江戸時代からずっと日本一でした。

東京新潟県人会は明治43年(1910)に設立されましたが、以来、錚々たる方が会長を務めてこられました。

来年で100周年。これを機に新潟県と東京

新潟県人会は全国そして世界から3万人が集まる「新潟県人大交流祭」を計画しています。下記のようなイベントが計画されていますので、ご家族、知人、友人をお誘い合わせのうえ、是非ご参加ください。

○ 百周年記念式典

日 時：平成22年1月30日 10:50～

場 所：新高輪ホテル 飛天の間

○ 新潟県人会大交流祭

日 時：平成22年9月25・26日

場 所：新潟市万代島 朱鷺メッセ

和久井 博 (高12回)